

【論考】

『ドゥルーズの自然哲学：断絶と変遷』合評会コメントへの応答

小林 卓也

はじめに

本稿は、2019年9月4日に、大阪大学吹田キャンパス人間科学部東館3階316講義室にて行われた拙著『ドゥルーズの自然哲学：断絶と変遷』合評会において、コメンテーターとしてご登壇いただいた小倉拓也氏と小泉義之氏によるコメントに応答したものである。拙著を丁寧に読みいただき、鋭利かつ適切なご指摘、ご批判をいただけたことは著者としてこれほど喜ばしいことはない。この場を借りてコメンテーターのお二方、合評会を主催いただいた大阪大学大学院人間科学研究科共生学系・共生の人間学分野の関係者の方々に感謝申し上げたい。

以下では、小倉氏と小泉氏から寄せられたコメントのうち、とりわけ、著者としては想定していなかった考えや、より掘り下げて考えてみるべき論点を選択して応答を試みたい。したがって、応答文ではあっても反論文のようなものを意図してはいない。また、応えたもの、応えられるもの、応えられないもの、応えるべきものの取捨に偏りがあることについては、紙幅の関係上というよりは著者の能力に起因することをあらかじめご容赦願いたい。

『ドゥルーズの自然哲学：断絶と変遷』概要説明

拙著は2013年に大阪大学人間科学研究科に提出した博士論文に修正、加筆を行ったものである。まずは本書の概要を説明しておきたい。

本書の企図は、ドゥルーズ哲学を概念単位やキーフレーズ単位で整理ないしそこに還元するのではなく、ドゥルーズ哲学の年代ごとの理論構成の変化と、これに伴う概念の変化を辿り、最終的に独自の「自然哲学」へと至るその思想的変遷を記述することにある。本書は第Ⅰ部においてドゥルーズ哲学における思想的断絶を明示したうえで、前期と後期の区分を明確化し、第Ⅱ部で前期のドゥルーズ哲学を超越論的経験論として特徴づけ、第Ⅲ部において前期ドゥルーズの企図を完遂するものとしての自然哲学を論じるという構成をとっている。以下では、本書の各所における主張を記す（本書からの直接、間接引用については、引用文のあとの丸括弧内に半角数字で表記する）。

第Ⅰ部：思想的断絶の明示

① ドゥルーズ哲学には1970年前後に断絶があること。（第一章）

本書ではドゥルーズ哲学の思想的断絶を、『意味の論理学』（1969）と『アンチ・オイディプス』（1972）における器官なき身体概念化の相違によって示した。器官なき身体は、『意味の論理学』では、メラニー・クラインによる幼児の発達段階論を参照軸とし、分裂病態勢から抑鬱態勢へと移行させ、自我を形成する発生要素として位置付けられている。これに対し『アンチ・オイディプス』では、部分対象を離散的に登録しあらゆる出来事や個体がそこで生起する場として概念化され、そこにおける「欲望する生産」の論理（流れ、部分対象、離散的総合）が取り出される。これは、『意味の論理学』における分裂病者の器官なき身体について、「分節化する器官を持たないという点（sans organes）」が強調され、〔注：『意味の論理学』の理論構成からすれば〕「言語的秩序や有機的体に対するその外部、あるいはその極限として実体化されている」（40）ことと対照的である⁽¹⁾。また、これにともない『アンチ・オイディプス』は、『意味の論理学』において採用されていたメラニー・クラインの議論を、全体-部分論的観点から批判しており、その位置づけが変化している。

② 断絶の要因はドゥルーズ哲学の理論構成の違いにあり、この断絶を境に、前期（1953-1969）と後期（1972-1993）に区別される。（第二章）

『アンチ・オイディプス』以前と以後を分けるという論点は、たとえば檜垣（2008）が提起する「個体化の議論の消滅」など、従来から指摘されている。本書は『アンチ・オイディプス』に見られる「人間と自然の同一性」という論点に着目し、これを自然という主題の前景化を拒む前期からの断絶点を示すメルクマールであるとするとともに、後期の自然哲学へと展開される起点であるとした。前期ドゥルーズの企図は、超越論的領野の探求、すなわち、個体発生を可能にする条件（言語的分節化、意味）の探求にあるのだが、その理論構成が、「人間と自然の同一性」という論点を肯定的に取れない要因となっている。本書から引用する。

哲学の脱人間化から区別しなければならない。

第Ⅱ部：前期の超越論的経験論

③ 前期ドゥルーズの超越論的経験論は、後期ドゥルーズの自然哲学を構成する概念や論理をすでに含んでいる（発生論、能力の超越的行使、感性（強度）論）。

1950年代から1960年代にかけてドゥルーズが行ったカント読解とベルクソン読解の帰結が、『差異と反復』で明示される超越論的経験論である。ドゥルーズは、ポスト・カント派由来の発生と超越の議論をカントの超越論哲学自体に読み込んでいるということを、講義『基礎づけるとは何か』（1956-1957）（ポスト・カント派由来の発生の議論）、「カント美学における発生の観念」（1963）（とりわけ、崇高論における諸能力（理性と構想力）の自由で未規定的な一致は、諸能力の超越的行使の発生のモデルである）、『カントの批判哲学』（1963）（目的論的判断における有限的悟性（悟性と直観の区別）の発生）の分析から論じた。

また、ドゥルーズは、ベルクソン哲学から直観と持続の脱心理化という論点を取り出していることを二編のベルクソン論（1956）と『ベルクソニズム』（1966）の比較から論じた（ベルクソンの直観、持続概念の脱心理化（Sauvagnargues 2009）、知性と物質（および空間の外部化）の同時発生、収縮と弛緩による持続と物質の連続性。リヨン、サン＝クルー高等師範学校で行われた『創造的進化』に関する講義（1960）には、知性と物質の同時発生の議論が見られる）。さらに、『差異と反復』においてドゥルーズは、カントにおける直観と概念（感性と悟性、受動と能動）の非連続性に、ベルクソンにおける持続の弛緩と収縮による連続性（質的多様体）を対照させることで、『純粹理性批判』「知覚の先取（予料）」の強度論を換骨奪胎する⁽³⁾、その帰結が超越論的経験論であると主張した。

超越論的経験論に見いだされる、能力の超越的行使、発生論、感性論といった論点が、前期と後期の断絶を超えて、後期の自然哲学を構成する論点となるとともに、前期において不十分であった（すなわち、人間と自然の同一性を肯定的に規定できない、分裂病を臨床的実体に落とし込む、脱人間化された自然の能動性を無差異や無底としてしか概念化できない等の問題がある）超越論的経験論の企図を真に完遂することになる。

第Ⅲ部：前期ドゥルーズの企図を完遂するものとしての自然哲学

④ 超越論的経験論における諸能力の協働が解体した状態（経験）、およびその対象を肯定的に記述するのが後期ドゥルーズの自然哲学である。（思想的断絶がありながらも、前期と後期を連続的に捉える理路を示す。）

『意味の論理学』において超越論的領野は、個体を構成すると同時に、それを取り囲む世界を構成する基盤となると述べられていた（中略）これはつまり、内部性と外部性、主体と対象、命題と事物の状態としての属性といったあらゆる二元性が超越論的領野において発生し、こうした根源的な二元性が成立したうえで、個体の人称性や、個体が帰属する環境世界（Unwelt）と、そうした複数の世界に共通の世界（Welt）がそこから派生するということである。（78）

個体の発生そのものが、同時に世界や自然から分離され、これらをその外部へと排除することになるのは当然である。（78）

〔こうした理論構成からすると〕『アンチ・オイディプス』が提起する人間と自然の同一性は、人間（個体）と世界（自然）を分節化する二元性が発生する以前の状態としてしか理解されないことになるだろう。すなわちそれは、個体と自然、人称と対象が依然として区別されていない未分化な深淵、あるいは、身体と身体が物理的に混交した分節なき全体性としてしか概念化されえないということである。（78）⁽²⁾

「自然と人間の同一性」をメルクマールとする断絶点を起点に、後期に向けて自然という主題が前景化される（『千のプラトー』（1980）、『スピノザ：実践の哲学』（1981）、『襞』（1988）、『哲学とは何か』（1991））。厳密に言うと、自然という論点はそもそも前期にも一貫してあった（『経験論と主体性』における人間本性、『カントの批判哲学』における人間的な自然、あるいは、エピクロスの自然哲学）が、前期ドゥルーズにおいて自然という主題の前景化を拒む要因が、「超越論的経験論」という企図そのものにあると本書では主張した。

超越論的経験論とは、とりわけ『差異と反復』（1968）において取り組まれ、カント哲学における諸能力の協働から各能力（感性、記憶、思考）を解放することを企図する。この意味でそれは「脱人間化」（déshumaniser）と形容することができる。しかし、諸能力の協働が解体した脱人間化の状態を『意味の論理学』の理論構成内で捉えた場合、それは言語的分節化以前の状態として捉えざるをえず、同様に、脱人間化された自然は、単なる無差異や底なしとして把握せざるをえない。逆に言えば、こうした脱人間化された人間のあり方、およびその対象となるべき自然の能動性や生産性を肯定的に捉えるのが後期ドゥルーズの自然哲学であり、この意味で、非人間主義的な（inhumain）哲学と呼んで前期

ドゥルーズ最晩年の文章「内在——ひとつの生……」には、依然として超越論的経験論という表現が見出されることから、ドゥルーズ哲学を超越論的経験論によって形容することは可能である。しかしそこにおいてドゥルーズは、超越論的経験論を、諸能力の超越的行使として理解していた『差異と反復』のように、人間的秩序の解体（分裂病）や脱人間化（めまい、薬理的経験）といった観点からは捉えていない。諸能力の超越的行使を人間性や人間的（言語的）秩序の瓦解として、いわば、単なる超越論的経験として解するのではなく、一切の人間的形象が介在しない非人間主義的な自然の運動性によってこれを捉えたものが、後期ドゥルーズにおける自然哲学である。本書では、脱人間化から非人間主義への問題構成の転回、これによる超越論的経験論という企図が完遂されるプロセスを記述することでこれを示した。

まず、『意味の論理学』でドゥルーズは、超越論的領野は、非人称的・前個体的であるとしながらも、「自己統合化の内在的な運動原理を享受する」と述べている。この観点から、『差異と反復』におけるカントへの批判、とりわけ、「純粋悟性概念の演繹」における意識の統一性（超越論的統覚）への批判を顧みたとき、ドゥルーズの本来的な企図は、超越論的主観の瓦解や消去ではなくその脱中心化であると考えることができる。カントにおいて客観的表象の統一が超越論的主観と相関しているからには、客観（すなわち自然）もまた脱中心化されることになる。

このように、脱中心化（脱人間化）された自然を未分化な深淵やカオスに陥らせることなく、カント批判から導かれた主観と自然（客観）の脱中心化の運動性を把捉するために援用されるのが、生態学（エトロロジー）的に解釈されたスピノザ（リズム、メロディ、リトルネロ）であり、これがドゥルーズの自然哲学を構成するものであると主張した。

評者によるコメントへの応答

小倉拓也氏コメント

小倉氏によるコメントは、ドゥルーズおよびガタリによる後期著作『哲学とは何か』における芸術と哲学の関係性から、拙著の議論構成や自然哲学を見た場合の齟齬や矛盾に焦点が向けられている。『哲学とは何か』においては、思考と感性は厳密に区別され、前者は哲学に、後者は芸術に帰属されている。ならば、「感性論の徹底が行きつく先は、自然哲学ではなくあくまで芸術哲学ではないか」というのが小倉氏の指摘である。当日の配布資料より引用する。（以下、評者のコメントの直接、間接引用については、引用文のあとの丸括弧内に評者名コメント、半角数字の順に表記する。）

このことは、超越論的経験論を能力論という観点から捉えた場合、「感性」と「思考」の関係をどう理解するかということに関わっている。評者（小倉氏）の理解では、後期ドゥルーズは、諸能力の協働の解体という前期の超越論的経験論のプロジェクトを徹底した結果、感性の領域と思考の領域を明確に区別するに至り、純粋感覚を芸術に関わるものとして、純粋思考を大文字の〈自然〉に関わるものとして区別し、対照しているように見受けられる。（小倉コメント：1）

小倉氏が指摘しているように、ドゥルーズの能力論を考えるうえで、感性と思考の関係をどう理解するのかという問いが重要となることについてまったく同意見である。『哲学とは何か』において哲学と芸術が、思考と感性に対照されているのもその通りである。さらに、超越論的経験論が諸能力の協働から感性を切り離し、感覚されうものの存在のみを感覚する能力の発生論（すなわち能力論）である限りにおいて、純粋感覚は、感性の超越的行使の延長上にあるし、その帰結が芸術哲学となるという筋が通っている。

小倉氏による指摘によってあらためて気づかされるのが、哲学、科学、芸術の領域区分を行い、各々に独自の領域を確定するという『哲学とは何か』という著作の企図のため、当然のことながら、哲学、科学、芸術を媒介する論点、とりわけ、感性と思考の連携（関係）という論点が『哲学とは何か』には欠けていることである⁽⁴⁾。本書における『哲学とは何か』の価値づけが低いのは、感性と思考の関係を思考することが自然哲学の主たる役割であると考えているからである。この意味で、拙著第六章「自然の感性論としてのドゥルーズ哲学」で論じたのは芸術哲学ではなくむしろ、カント的な美学（芸術）と感性論（哲学）の区別、分類を批判し、両者を架橋するのがドゥルーズの感性論であるということであり、自然哲学であるということであった。

さらに言えば、自然哲学の要諦は、感性と思考を区別したうえで、両者が相関するとともに、相乗的に相互に固有の存在様態を変容していく、そのプロセスを思考することにあると考えている。拙著同章の最終部分から引用する。

ドゥルーズの自然の感性論という観点からすれば、感性論か美学かという「カントの感性論によって分裂させられた二元論（Sauvagnargues 2009: 300）」はその妥当性を失うことになる。なぜなら、知性と感覚、悟性と感性、上級認識能力と下級認識能力を区別するカント哲学とは異なり、感覚そのものにおいて非人間的な知性が発生し、当の知性

のなかには人間的な意味においては感覚しえない諸感覚が包含されているということをドゥルーズの感性論は肯定的に示すからである。(258)

「感覚そのものにおいて非人間的な知性が発生し、当の知性のなかには人間的な意味においては感覚しえない諸感覚が包含されている」と書いてはいるが、非人間的な知性、そこにおける感覚しえない諸感覚が具体的に何を指すのかが示されていないため、あいまいな記述ではある。少なくとも引用文の意図としては、非人間的な知性、感覚しえない諸感覚、さらにそれらのあいだの関係性とその関係性の変様を思考するのがドゥルーズの自然の感性論であるということであり、そのプロトタイプは「ルクレティウスとシミュラクル」のエピクロス派に見いだされるように思われる(拙著第五章「前期ドゥルーズ哲学における自然の問題—『意味の論理学』におけるエピクロス派解釈について」を参照)。また、ドゥルーズおよびガタリの著作に限定して言えば、当の役割を担うものとしては、拙著で論じた生態学に加え、『千のプラトール』における地質学的議論を挙げることができる(小林(2017)を参照)。

次いで、小倉氏は拙著における超越論的領野についてこうコメントしている。

『差異と反復』も『意味の論理学』で「脱人間化」の結果帰結するのは、無差異の深層ではなく、前個体的で非人称的な超越論的領野では、無差異の深層から区別されるものとしての1960年代の超越論的領野は、すでに「非人間的」ではないのか。(小倉コメント：7)

「脱人間化」が諸能力の超越的行使を意味する限り、その帰結は、前個体的で非人称的な超越論的領野でなければならないし、『意味の論理学』においてドゥルーズ自身がカオスに陥ること(要するに無差異や深淵に陥ること)を避けるべきであると考えていたことも拙著において指摘した。小倉氏と著者の違いは、『意味の論理学』において脱人間化(の状態)に相当する器官なき身体 of 解釈にあるように思われる。おそらく小倉氏の解釈では、『意味の論理学』における「器官なき身体」に、善き対象の「形態」を与え、ノイズから「音」を構成する、その意味で未分化ではない構成的機能があると考えており、ゆえにそれは単なる無差異の深層ではない。しかし、拙著の理解では、『意味の論理学』の器官なき身体は、純然たる深淵、未分化な深層でしかなく、それ自体に構成的機能はない。厳密に言えば、器官なき身体それ自体に構成

的機能はないのだが、それが分裂病態勢に後続する抑鬱態勢から顧みられたとき、「すでに(つねに)失われてしまったもの」という事実的な規定とともに、充実ないし完全性の理念としてそれが規定可能となるとともに、そこから完全性と充実性が善き対象へと転写され(ということは、器官なき身体が位置する深層と善き対象の位置する高所は、抑鬱態勢を挟んで鏡の裏表のような関係にあると考えられる)、これによって脱性化と罪責感の継続を伴う第三次配置への移行が可能となる。いわば、器官なき身体 of 構成的機能は、事後的に付与されると著者は考えている。

この意味で、『意味の論理学』における器官なき身体は、超越論的機能を持たない。しかし『アンチ・オイディプス』や『千のプラトール』において、これが自然の問題と結びつくことで、すなわち、器官なき身体が、定型発達以前のあるいはそれから逸脱する「脱人間化」の文脈からではなく、欲望する生産や自然の運動性という「非人間的」文脈から解釈し直されることによって、前個体的で非人称的な超越論的領野に「格上げされる」というのが拙著の読み筋である。

さらに、『意味の論理学』における動的発生(分裂態勢からの表面、超越論的領野の発生)と超越論的領野との関係について、小倉氏はこう指摘する。

しかし、カオスに陥ることのない超越論的領野それ自体が、動的発生の成果物であるはず。本書序盤の動的発生の評価と矛盾しないだろうか。(小倉コメント：15)

『意味の論理学』における超越論的領野については、上記で記したように、それを発生させる動的発生それ自体に構成的機能がないという点を除いて、超越論的領野が動的発生の成果物であることに、小倉氏と著者とのあいだに意見の相違はない(発生の成果物であるにもかかわらず、構成的機能がないというのは語義矛盾のように見えるが、前者から後者への物理的、自然法則的、質料的な意味での因果関係がないという意味で著者は述べている。意味(すなわち超越論的領野)、出来事は、物理的領域における能動と受動の結果、効果であるが、それらが物理的領域から区別され、その非物体的な特性を維持、存続させるとともに内属させるには、別の因果性(形而上学的、準-原因)を要するという『意味の論理学』の議論を想定している)。小倉氏が矛盾とするのは、超越論的領野は動的発生の成果物であるにもかかわらず、『意味の論理学』における動的発生の議論をメラニー・クラインへの価値づけの変化とともに批判し、『アンチ・オイディプス』以降の動的発生の議論の欠如を主張する拙著の構図であると思われる。

拙著では、『意味の論理学』における動的発生のプロセスと、『アンチ・オイディプス』において動的発生に相当する欲望的生産のプロセスとのあいだに相違があると見ている。この小倉氏の批判（指摘）に従って述べるのであれば、『意味の論理学』の動的発生は超越論的領野を生み出すのに対し、『アンチ・オイディプス』における欲望的生産は、それ自体が超越論的領野であるとともにそれ自体における発生の論理（欲望する生産、離接的総合）によって自らを生産する。

そのメルクマールとなるのが『意味の論理学』と『アンチ・オイディプス』における器官なき身体の位置づけの違いであり、メラニー・クラインの議論への価値づけの違いであることを拙著では指摘した。具体的にどう違うのか。拙著では、『意味の論理学』と『アンチ・オイディプス』におけるメラニー・クラインの位置づけの違いを、部分と全体の関係から論じた。統合されるべき全体（抑鬱態勢）を前提としてその部分（器官なき身体、分断された身体）を論じる前者に対して、後者においては、全体も統合も前提としない部分（対象間）の接続と切断が欲望的生産として提示される。前者では乳房（部分）はいずれ母親（全体）のそれとして帰属しようという限定を被ることになる。これに対し、後者の乳房は母親に接続することもあるが、それもまた、あくまでも部分としての母親であり、口（部分）、搾乳機（部分）、牛（部分）など他の部分対象と同列におかれる（これを離接的総合と理解している）部分に過ぎず、部分対象間には従属ないし帰属関係が入り込むことがない。この違いがあると考えている。

自然哲学について

拙著のなかで自然哲学におけるリトルネ口を論じた部分について、これは、ある種の表現性や記号機能がいかにして派生するのかを論じたものであり、「まさに動的発生論の問題であり、純粹感覚（感覚の存在）の問題」（小倉コメント：15）であると小倉氏は指摘している。まったく同意見である。ただし、動的発生論が前期と後期において内実を変えているということ（繰り返すが、動的発生からの超越論的領野の発生ではなく、動的発生かつ超越論的領野である自然内部の運動性における発生の違い）はすでに指摘したとおりである。

小倉氏の指摘の思惑からは逸れるかもしれないが、表現性や記号機能が物理的運動や質料性から区別される限りにおいて、それは物理的対象（すなわち認知的、現象的対象）ではなく、「思考」の対象であると考えている。イエラムスレウの発想から言えば、そのような「思考」を形式とする実体としての「物理的運動」や「質料」が存在するし、さらにそこから派生する表現性である実体の形式を、先の思考とは異なる「思考」が把握するというよう

に、感性と思考が運動し、相乗していくことを想定しているのがドゥルーズの自然哲学であると著者は考えている。

小泉義之氏によるコメント

小泉氏のコメントは、拙著における感覚（感性）の位置づけにその重点が置かれている。小泉氏による読み上げ原稿より引用する。

感覚の超越的行使で感覚されるものは、感覚しえないが感覚することしかできないものですが、この言い方について、小林さんも、「感覚しえない」とはカント的で常識的な意味の感覚では感覚できないが、「感覚することしかできないもの」なので感覚されていると解していますが、そのように感覚に二義性を持ち込んでよいのかという疑問が立ちます。普通は見えないが、超越的行使で無理をしたらなら見える、という理解でよいのかということです。例えば、赤外線は見えませんが、暗視カメラを目に接続すれば見えます。そのようなことなのかといったことです。（小泉コメント：3）

小泉氏が指摘されている通り、拙著では「感覚しえない」とはカント的な意味（すなわち、感性が悟性、構想力など他の諸能力と一致、協働して機能している状態）においては感覚できないと解している。しかし、「感覚することしかできないもの」を（通常の意味での感性においてつねに、すでに）感覚されているとすることは、当の感覚することしかできないものを自然的知覚の対象に落とし込むことになると考えているので、想定してはいなかった。さらに、小泉氏が適切にも、小林（2019a）の論旨を掬い取っていただいたように、『差異と反復』における理念論-強度論と能力論の間の齟齬、すなわち、前者がカント的な超越論哲学における経験の基礎（根拠）づけの議論に収まるのに対し、後者は経験の脱基礎（根拠）づけを企図する限りにおいて両者には齟齬があるという観点からこの議論を顧みると、感覚することしかできない感覚対象のステータスも、またそれを感覚する能力のステータスも、それ自体何を意味するのかドゥルーズ自身が明言しておらず、実際にはよく分からないとも思っていた。いずれにせよ、拙著の問題は、感覚することしかできないものを感覚する感官、感性について積極的な記述を試みていないことにあるかと思われる。

とはいえ、小倉氏への応答部で述べたように、少なくとも、感覚することしかできないものを感覚する（感覚している）と言うとき、それは、常識的な意味での感覚しえないものを感覚する（感覚している）という場合の当の感覚（ないし感官）とは、別の感覚であると解するべきであるとは言えるだろう。

この点から改めて考えてみる。能力の超越的行使によって諸能力の協働から解放された感覚は、当の能力によってのみ感覚されるべきものを感覚する能力に生成するが、そこにおいて感覚されているのは、強度それ自体（すなわち自然的知覚として対象化された存在者）ではないと考えなければならない（そうでなければ、小泉氏が指摘するように感覚に二義性を持ち込むことになる）。そうではなく、感覚されることしかできず、感覚されるべきものとは、感覚可能なものと感覚不可能なものとの差異、経験と経験不可能なものとの差異ではないだろうか（拙著の注でも言及したが、江川隆男氏は適切に、超越的行使の対象は、「現実における所与とセンシビリア〔著者注：所与を感覚可能なものとして与えるもの〕における諸（力）との間の差異」（江川 2003：88）であると明言している）。この差異そのもの（それ自体における差異、それ自身のための差異）は、通常の意味（繰り返すが認知的対象としての）感覚の対象ではなく思考の対象であり、さらに、当の差異そのものを感覚する感性のステータスも思考の対象となるとすれば、『差異と反復』第三章における感性から（記憶を媒介するが）思考へとリレーするという議論とも整合的である。さらに、このときの思考もまた、思考することしかできないものを思考するからには、当の思考とは何かという問いによって、思考のステータスが再規定されうるものとして生起する、というように、感性を端緒として思考をさらなる思考へと駆動すべく連動すると考えることができるのではないだろうか。

自然哲学と脱人間化について

さらに、小泉氏は、拙著が提示するドゥルーズの自然哲学と脱人間化、非人間主義といったタームとの関係について次のように指摘する。

小林さんは、「超越論哲学」の「脱人間化」、「人間主義」からの「脱却」について、「脱人間主義的な議論の先に見いだされるべき自然」といった書き方をしています（87-88）。素朴に言いますが、自然哲学にあつて、人間が消えるわけはありません。というか、人間なる種・個体が存在していても一向に構わないはず。端的に言えば、感覚する存在者、感性的存在者、形而上学的な感官が存在すればよいだけだからです。（小泉コメント：7）

小林さんの論法をもってするなら、人間と自然の同一性は、それを肯定的に自然哲学として語るには、どうしても主観だけでなく、人間そのものも絶滅した状態を考えなければ

ならなくなるのではないのでしょうか。人間、主観、それを引き裂きと言おうが、襲と言おうが、その類のものが残っていたのでは、あるいは、残っていなければ、カオスに、知覚のラプソディに陥るというわけです。深みに嵌るというのです。／この論の運びは、明らかに、カント的な枠内にあります。少なくとも、反カント的でベルクソンの的ではないと思います。（小泉コメント：8）

拙著の見立てでは、カント的な超越論哲学が前提とする超越論的統覚を、諸能力の協働からの能力の解放（これを前期ドゥルーズは超越論的経験論と呼んでいた）によって批判することを脱人間化と呼び、しかし、ドゥルーズによる批判の矛先は、超越論的統覚そのものの瓦解、消失にあるのではなく、その中心化、統合化に向けられているとした。ドゥルーズの企図は、むしろ、その脱中心化、分裂化する運動を担保したうえで、その運動性を自然内部における個物の運動性のなかに見いだすことにあり、拙著ではこれを脱人間化に対して非人間主義として規定した。その帰結に自然哲学があるが、カント的な意味ではないとはいえ、超越論哲学の一種である限りにおいて、それは、小泉氏が指摘する通り、カント的な枠内に収まっているといえる。

したがって、ドゥルーズの自然哲学において人間が消えることはない。むしろ、そのような非人間主義的な自然の運動性を捉えるためには、あるいは、自然内部においてそのような運動性を把握しうる、「感覚する存在者、感性的存在者、形而上学的な感官」とは何かを問うためには、ある種の人間的知性、人間と言って語弊があるとすれば、思考や学（science）そのもの（先の小泉氏コメント引用部における「形而上学的な感官」にあたるだろうか）が必要であると、拙著ではむしろ、人間や思考の存在を重視している。同様に、「人間そのものも絶滅した状態を考える」人間や思考はどこまで行っても残ると考えており、そこにこそ哲学（すなわち、自然哲学）が存続する価値があるとも考えている。

冒頭に述べたように本稿は、小倉氏と小泉氏にいただいたコメントすべてに回答することができず、あくまでも両氏のコメントをふまえ、現時点から拙著を振り返った限りで論じたものに過ぎない。両氏には、的確に拙著の趣旨を読み取っていただき、また建設的な批判、指摘をしていただいたことにより、拙著の議論をより明確に自ら把握することができたし、詰めるべきポイントもあらためて明瞭となった。両氏への感謝は、今後のさらなる仕事によって返していきたい。

参考文献一覧

- 江川隆男『存在と差異 ドゥルーズの超越論的経験論』、知泉書館、2003年。
- 檜垣立哉「ドゥルーズ哲学における〈転回〉について——個体化の転変」、小泉義之・鈴木泉・檜垣立哉編『ドゥルーズ／ガタリの現在』所収、平凡社、2008年。
- 小林卓也「ドゥルーズの自然哲学序説」、『フランス哲学・思想研究』第22号所収、2017年。
- 『『差異と反復』におけるトリガーとしての問いの存在論』、『ドゥルーズの21世紀』所収、河出書房新社、2019a年。
- 『ドゥルーズの自然哲学：断絶と変遷』、法政大学出版局、2019b年。
- 近藤和敬、野元達一「後期ドゥルーズ哲学における「脳」という問題設定についての試論」、『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』第86巻所収、2019年。
- 小倉拓也『カオスに抗する闘い ドゥルーズ・精神分析・現象学』、人文書院、2018年。
- Sauvagnargues, Anne., *Deleuze. L'empirisme transcendantal*, Paris, PUF, 2009.

注

1. 本書にて断絶が生じた時期を70年前後という曖昧な表現にしているのは、『アンチ・オイディプス』（1972）に先立ち、ドゥルーズとガタリがはじめて共同で執筆した、*L'Arc* 誌所収のクロソウスキー論「離接的総合」（1970）のなかに、精神分析家によるオイディプス化に対する分裂症化（schizophrénisation）という対立軸および、後者を「欲望する生産」の論理に繋げる論点が出ているためである。
2. ただし、小倉（2018）も指摘するように、『意味の論理学』においては、超越論的領野を未分化な深層から区別し、単なる無秩序やカオスに陥らないその固有のあり方をすでに論じていることを考えると、同書において超越論的領野から区別され、あくまでも深層に位置づけられていた器官なき身体が、『アンチ・オイディプス』にいたって、この超越論的領野に同一視され、いわば上昇したと解することができる。
3. 「感性の欠如として理解される強度ゼロとは、むしろそこにおいて感性が、経験的な感性（的直観）によっては感覚しえないものに直面し、直観の形式との協働が破綻する契機として肯定的にとらえられるべきである。それは、実在の否定 = 0ではなく、感性がカント哲学における諸能力の協働から解放される肯定的な極限として理解されるべきであるとドゥルーズは考えるのである。」（195）
4. とはいえ、『哲学とは何か』における脳についての議論が、哲学、科学、芸術を媒介するものにあたる解することもできる。しかし、後に論じるように、拙著の自然哲学の関心からすると、当該議論のなかに、哲学（思考）と芸術（感性）が相互に相乗的に関連しあい、各々の領域自体が相互的に変様するというプロセスを見出すことは困難であるように思われる。近藤・野元（2019）は『哲学とは何か』における脳概念が、哲学、科学、芸術を相互に接合することによって相互干渉を行うものであるとし、その特徴を的確に整理している。『哲学とは何か』において、とりわけ哲学がニーチェ哲学以降の「形而上学」を構想していること、ドゥルーズとガタリにおける「自然」がスピノザの「神即自然」の読み直しにあること、また、哲学における脳の議論が「知性の発生学」に関わるものであることについて、全面的に同意する。しかし、近藤・野元（2019）による卓抜な整理から、同書における芸術、科学、哲学の脳概念を媒介とした「接合」「干渉」関係について読み取られるのは、哲学における俯瞰と芸術における縮約の「平行関係」（87）、「感覚のための筏が「合成平面」であり、ファンクションのための筏が「指示平面」である」（96）、さらには、科学におけるファンクションが「他の〔著者注：哲学と芸術という〕二つの薄層にたいして干渉し、それらが己を維持するのに役立てられる」（89）というように、三領域の並行性とその強化であって、それらの相互的な変様という拙著における自然哲学の関心に応えるものではないことは明らかである。